ポテトの文化誌

山内　昶

本稿は「ポテトの文化＝社会＝経済史」の続編である。前稿では、ポテトが南米で栽培され始めた時代と場所、大航海時代にスペイン人が《発見》して持ち帰った経緯、西洋での拒否と受容の歴史などのあらましを考察し、あわせて近代ヨーロッパ各国語でなぜ多数の名称が混在しているのかについても解明しておいた。本稿ではそれ以降の問題をとりあつかい、ポテトなくして近代西洋の資本主義が成立しなかった、というのは極論だとしても、少なくともあれほど急速に発達できなかったことを明らかにし、最後に異文化受容の日欧の差異性について検討しておきたい。

四　普及

《悪魔の食物》として、ハンセン氏病やルイレキの原因だとして、一世紀以上もの長い間拒否されてきたポテトが、西洋で一般に普及しだしたのは大体一八世紀後半からのことだった。拒否を受容に変えたのは、いうまでもなく人口圧と空腹にほかならない。どんなに強い食物禁忌も飢餓状態では大抵破られることは、極限状況におけるアントロポファギアとして歴史が示す通りである。

とはいえ、一九世紀以前の西洋の人口動態の正確な数字は誰にも判らない。人口調査と統計学がまだなかったからである。クーリッシェルの推定によると、ヨーロッパの総人口は一六〇〇年の九五〇〇万から一七〇〇年の一億三〇〇〇万、一八〇〇年には一億八八〇〇万人に

増加していた。[1] 二〇〇年間に約二倍の増加である。ブローデルによると、ヨーロッパ・ロシアを含む総人口は一六五〇年の一億人から一八五〇年の二億六八〇〇万人へと、この二〇〇年間に約二・七倍に達していた。[2] むろん概数だが、当時の人口爆発は、今日のように低開発国ではなく、主としてアジアとヨーロッパで起っていた。その理由については別の論文[3]で詳しく論じたことがあるのでここでは繰返さない。が要するに、低開発国で長い間人口が一定水準に停滞していたのは、定常経済が常態であって、生産手段とりわけ土地の共同体的所有がまだ維持されていたからである。これに対し西洋では、例えばイギリスのエンクロージャーにみられたように、多数の農民が生産手段から解放されて自由な労働者となったが、労働力を売る以外に生きる術がなく、低賃金→増収のための労働力としての子供の増産→それによる一層の労賃低下→更なる子供の拡大再生産という、成長経済の悪循環が生じていたせいだった。一八、九世紀のイギリスでは一〇人位の餓鬼が生まれる家庭はざらで、幼児死亡率が高く、両親のどちらか一方が六五歳になるまで一人でも子供が生き残っている確率を九五%に高めるためには、平均六・三人の子供が必要だった。「貧乏人の子沢山」が通則だったのである。

人口が増大するとそれに見合う食料が必要とされるが、従来の農作物や生産方法では、タイム・ラグが生じ急速に対応できなかった。コムギは非常に収穫率の悪い作物で、一粒まいても五、六粒しか戻ってこない。そこから当然人口増→食料不足による飢饉→人口減→食糧生産拡大→人口増というパターンの繰返しが起った。じじつ穀物の慢性的不足で、一七〇九～一〇年には欧州全体、一七三九～四一年にはフランスとドイツ、一七四一～四四年にはイギリス、一七六四～六七年には南欧、一七七一～七四年には北欧という風に大飢饉が頻繁に発生した。むろん餓死者の大多数は低所得者層で、栄養や衛生状態の悪化のため赤痢、コレラ、チフスなどの疫病も流行する。

それに輪をかけたのが、頻発した戦争だった。一七、八世紀は戦乱の世紀といってもよい程で、三〇年戦争（一六一八～四八年）、ルイ一四世の侵略戦争（一六六七～一七一四年）、北方戦争（一七〇〇～二一年）、ポーランド継承戦役（一七三三～三五年）、オーストリア継承戦争（一七四〇～四八年）、七年戦争（一七五六～六三年）、バヴァリア継承戦役（一七七八～九年）、フランス大革命とナポレオン戦争（一七八九～一八一五年）と戦火が荒れ狂い、ために農村は疲弊、荒廃し、満足な農作業もできず、できても農作物は軍靴と馬蹄に蹂躙されてしまった。飢餓に襲われた人々はイヌ、ネコ、ネズミ、ヘビはおろか、草の根や土まで食べ、墓から死体を掘りだして食べた記録まで残っている。

戦争には兵士が必要だが、兵士には食糧が必要である。だが地表で育つ農作物は兵馬が通過し、戦場になればなぎ倒され、しかもムギ類は播種から刈取りまでの期間が長く収穫率も悪い。そこで悪魔の食物に目をつけたのがプロイセンのフリードリッヒ大王だった。この啓蒙君主は、さすがに開明されていただけあって、迷信よりも実利を重視し、栽培期間が短く、ムギ類よりも面積当りの収穫量が多く――穀物の二～四倍あった――地下にあるので兵火に荒らされず、かつ食べるのにさほど加工を要しないポテトの強制栽培令を発布する。一七七八年から翌年にかけて戦われたバヴァリア継承戦役が《ポテト戦争（Kartoffelkrieg）》と呼ばれたのもこのゆえだった。なおこのカルトフェルというドイツでの奇妙なポテトの名称の由来については前稿で述べたのでここでは繰返さない。

ところで、プロイセンがオーストリアと戦った七年戦争で、マリア・テレサ側についたフランス軍のなかにオーギュスタン・パルマンティエという薬学・農学者がいた。プロイセン軍の捕虜となり収容所でブタ並みにポテトばかり食わされて、その食物としての価値を知った。そこで帰国すると、一七七二年彼はポテトに関する論文をブザンソンの科学アカデミーのコンクール――それは新しい食物の《発明者》に賞をだすものだった――に出して優勝する。だがそれ位ではポテト革命を起すことができなかった。そこで廃兵院の薬局長になっていたパルマンティエは、ルイ一六世にとりいって国王や王妃マリー・アントワネットの胸や帽子にポテトの花を挿してもらい、またパリ郊外にポテト農園を作って、周囲にものものしく柵をめぐらし、武装した兵士にこれ見よがしに見張りをさせた。この光景をみた人々は、何かよほど高価なものが植えられているに違いないと想像力をふくらませ、夜間に見張りがいないのをよいことに――これもパルマンティエの計略だったが――盗みだし、こうして次第にポテトがフランス全土に普及していった。だからこの当時ポテトはパルマンティエールとも呼ばれていたのである。

さらに大革命がポテト革命の後押しをした。国民公会と総裁政府の時代にひどい飢饉に苦しんでいた人々は、パルマンティエールに生命の綱をみいだし、革命政府はテュイルリー公園をポテト畑に変える命令を出した。一七九三年に出版されたサンキュロット向けの料理本『共和国の料理』にはすでにポンム・ド・テール・フリットのレシピがのっており、以後このフレンチ・フライド・ポテトがフランス人の国民食となった。ロラン・バルトもその『神話作用』のなかで、これを《フランス的なものの食記号》だといっていたのである。

ポテトの普及はヨーロッパの穀物消費量の減少からも逆に裏書きされる。例えばネーデルランドでは一六九三年の一日一人当り〇・八一

六キログラムから、一七一〇年には〇・七五八、一七四〇年には〇・六八〇、一七八一年には〇・四七六、一七九一年には〇・四七五キログラムへと約一〇〇年間でほぼ半減した。「この消費量低下は、フランドルにおける穀物消費量が四〇パーセント方じゃがいもに取って代られたことを意味している」[4]とブローデルはいっている。

貧者の食物

ポテトの作付面積が増えるのに反比例して当然のことながらその価格は下っていった。イギリスの例をとると一七世紀初頭一ポンド一二ペンス――これは当時のニワトリやウサギ一羽に相当する――だったのが一八世紀末には半ペンスに低下する。穀物に比べて単位面積当りの収穫量がよかっただけではない。生育が早くて年二回の取り入れが可能だったし、「怠け者の作物」といわれていたように種芋を切って灰をつけて植えるだけでよく、穀物のように播種後の手入れにも大きな労力を必要としなかった。それに国によっては初めのうち家庭菜園などで小規模に栽培されていたので十分の一税や地代の対象にもならなかったのである。また、もともとアンデス高地の原産だったから、穀物に不適な痩地でも寒冷地でもよく育ち、有性結実の穀物とは違ってクローン型なので天候異常にもさほど影響されなかった。味は淡白で、澱粉が多く、カロリー源としては最適の作物だったのである。アダム・スミスは『諸国民の富』（一七七六年）で次のようにいっていた。

「もしこの根菜がヨーロッパのある地方で人民がふつうに愛好する食物になり、そのために現在小麦その他の穀類が占めているのと同一の割合の耕作地を占めるようにでもなれば、同一面積の耕作地は現在よりもはるか多数の人民を扶養するであろうし、また労働者は一般に馬鈴薯で養われるようになるから、耕作に使用されたいっさいの資財を回収し、いっさいの労働を維持したあとになおいっそう多くの剰余がのこることになるであろう。そのうえ、この剰余のいっそう多くの分けまえが地主に属することになるであろう。人口は増加するであろうし、また地代は現在よりもはるかに上昇するであろう。[5]」

生産諸条件が一定だと仮定して、投下資本に対する収益率のよい作物が《発見》され、その結果地代も上るとすれば、当然地主階級はそ

の植物を作付けするよう借地農や農業日雇労働者に要求するだろう。農民は概して保守的であり、急激な食文化の変化を嫌うが、とはいえ安価な食物への魅力やさし迫った飢餓に抗すべきもない。こうしてヨーロッパのいたるところで、一九世紀に入ると経済的ないし経済外的強制によってポテト栽培が急速に普及する。

しかもポテトは地主階級に富をもたらしただけではなかった。工業資本家にも大きな波及効果を及ぼしたのである。というのもスミスやリカードの古典経済学の生存費説によると、労働（力）もまた商品であり、他の商品同様、労働の自然価格はその生産に必要な労働量によって、いいかえれば労働者が自己及び子供を再生産する生活資料の価格によって規定される。一定の時間内により安くより多く生産できる食料が出現すれば、それだけ賃金もまた低下するだろう。むろん生活資料の価格と労賃とは直接に連動しない。他方で賃金は労働市場の需給によって支配されるからであり、労働の自然価格と市場価格はたえず乖離しながら一致する傾向にある。なぜなら、労働市場での需給の伸縮は景気変動に規定され、そしてまたこの景気変動は資本の蓄積メカニズムに規定されている。ところでこの資本構成の高度化による蓄積の急速な発展が可能なのは、いうまでもなくコストとしての賃金部門の低下にあった。従って労働者が高価な白パンではなく、安価なポテトを食べれば、こうした循環過程の結果、産業資本の利潤率は当然のことながら増大するだろう。スミスやリカードと同じく労働価値説から出発したマルクスが『資本論』で、「労働の平均価格、すなわち労働力の価値は、必要生活手段の生産価格によって規定されている。後者が上るか下るかすれば、前者も上るか下るかする」[6]といったのも、原因が結果となり結果が原因となるこのような循環構造の把握の上にたっての言葉だった。ポテトが近代西洋の資本主義を作った、少なくともその急速な成長はポテトなしにはありえなかった、というのもこの意味においてなのである。ポテトにかんする詳細、活潑な名著をかいたサラマンも、そのエピローグで次のようにいっていた。

「明らかに、食料が搾取の道具として用いられるとすれば、役にたって入手しやすい食物ほど、一層効果が抜群だろう。ポテト、ライス、マイス何であれ、自然の恵みが豊かであるほど、この二重の作用、即ち人を養うことと搾取することの間の対照は一層極端になる。〔…〕雇用者階級は安価な労働を望んでいた。賃金は、なんの保護機構もなかったので、主として労働者の生存コストによって決定されていた。ポテトの食事は、そのコストを最低限にひき下げることを可能にしたのである。[7]」

かつてヨーロッパ人はアメリカ大陸を武力で暴力的に占領したが、今やアンデス先住民はヨーロッパ大陸をポテトで平和的に制圧したわけ

である。こうしてエンゲルスはその『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四五年）でこう書くにいたっていた。

「ひとりひとりの労働者の日常の食物そのものは、もちろん労賃に応じてちがう。わりと賃金のよい労働者は、とくにどの家庭もみないくらかかせぐことのできるような工場労働者は、このような状態がつづくかぎり、いい食物に、つまり毎日かかさず肉にありつき、夕食にはベーコンとチーズにありつく。もっとかせぎの少ない場合には、日曜だけか、あるいは週に二、三度しか肉がなく、そのかわりたくさんのジャガイモとパンがある。しだいにかせぎの少ない層にいくと、動物性の食物は、ジャガイモのなかにきざみこまれたわずかばかりのベーコンになってしまう――もっと低い層にいくとこれもなくなって、ただチーズと、パンと、オートミール（porridge）と、ジャガイモだけしかなく、最下層のアイルランド人のところまでいくと、ジャガイモだけが食物になっている。〔…〕しかし、以上のことはすべて、労働者が仕事にありついているという前提のもとで言えるにすぎない。もし労働者に仕事がなかったら、彼はまったく運命のままにもてあそばれ、もらったものや、乞食をしてあつめてきたものや、あるいは――盗んだものを食べるほかない。そして、もしなにも手にはいらないときには、まえにわれわれの見たように、彼はまさに餓死するのである。とにかく、食物の量は、食物の質と同じように賃金に応じてきまり、また賃金の安い労働者にあっては、もしそのうえに多数の家族でもかかえていれば、完全に仕事にありついているときでさえ飢餓に陥るということは、わかりきったことである。そして、これらの賃金の安い労働者の数は、きわめて多いのである。[8]」

悲劇

だがこの時、悲劇が起った。エンゲルスの本が出版されたまさにこの年、ヨーロッパでポテトの大凶作が勃発したのである。

一八四五年八月一六日の『ガーディナーズ・クロニクル』紙にワイド島で今まで見たことないポテトの病気の発生がまず報告され、二三日にはリンドレーの次のような記事が掲載された。「致命的な病気がポテト作物に発生した。いたるところで打撃をうけているらしい。コヴェント・ガーデンにも健康な種芋が一つも見当らない。[9]」九月末になると、ポーランド、ドイツ、ベルギー、フランスなどからも凶報が

届き、大陸全土でもこの病気が急速に伝染していた。最初葉に点々ができてやがてそこが黒ずみ、《壊疽》がしだいに茎を侵して塊茎をも腐らせる厄介な病気で、イギリスではブライト（blight）と呼ばれた。疫病菌（*Phytophthora infestans*）によるものである。まだ細菌学が発達していなかったので、当時の人々は空気中の電気のせいだとか、汽車のような怪物を走らせたためだとか、色々とその原因について噂しあった。信心深い人々は、近代の機械文明を創出した人間の傲慢さに対する神の怒りが降ったのだともいったらしい。

神罰ではなかったにしても、確かに新しい産業文明と無関係ではなかった。労働者にできるだけ安い食物を与え、労賃を引下げて競争にうち勝ち、利潤を増大させて資本蓄積を計るために、ヨーロッパのあちこちで始められたポテトのモノカルチャーがその大きな原因だったからである。むろん原産地でもこのポテトのペストは古くから存在した。しかしアンデス原住民は原産種に近い、したがって小粒のそれだけ蔬味（えぐみ）の強い赤、黄、紫色の何百種というポテトを時期をずらして小区画ごとに分植し、病害の蔓延に対策を講じていた。体験から一区画の一品種がやられても、他は助かることを知っていたのである。これに対し先進文明国では様々な品種改良によって味もよく収穫量も多い少品種を広汎に単一栽培していたので、それだけ病原菌の感染が早く大規模だった。病害に有効なボルドー液は一九世紀末までまだ発明されていなかったので、凶作は二年から三年続き、例えば一年のうち一〇カ月はポテトばかり食べて暮していたといわれるアイルランドでは、中世のペストに匹敵するような大災難に見舞われ、人々は飢えでばたばたと倒れていった。飢餓だけでなく、栄養不良の底辺の人々をコレラ、チフスなどの伝染病が襲いかかり、穀物の値段は急上昇し、現物賃金制度（truck system）だったので買う金もなく、社会的セフティ・ネットもない状態で、こうした人災のせいでも災害の規模はそれだけ大きくなったのである。一八四七年六月にアイルランドを旅したダファリン卿とボイル閣下は次のような記録を残していた。

「ダブリンを発つとすぐに我々は肝をつぶすような光景に出会った。道傍には死体がごろごろ転がっている。いくつかの町では数が多すぎて埋められていなかったのである。いたるところでチフスが猛威を振い、立止まると、飢えてほとんど裸の物乞いにとり囲まれた。荒れはてた小屋のなかにもしばしば埋められないままの死体が転がり、いたるところで絶望の気配が充満していた。小さな町では小売商人も破滅し、その多くは小作人のケースより良いとはいえなかった。[10]」

その結果、アイルランドの人口は一八四一年の八一七万人から五一年には六五五万人と、じつに一六二万人も減少する。百分率で示せば

約二〇％減である。スペイン人がアンデスに侵入して以来、一五三〇年から七〇年までのインディオの人口減少率は驚くなかれ六五％内外に達していたから、それに比べるとまだしもといえるかも知れないが。もっとも直接の暴力的な殺害だけではなく、全く免疫のないハシカ、感冒、天然痘などの新しい病気が原因の場合も少なくなかったが。同様にアイルランドでも一六二万人がすべて餓死者ではない。周知のように故郷を捨てアメリカに渡った移民も多かった。その中にケネディ姓の家族がおり、従ってポテトが大統領を誕生させたともいえるのである。

しかし千人当りの死亡率は、やはりこの災厄の凄まじさを物語っている。飢饉前には七・三‰だったのが、四六年には一七・二、四七年にはじつに五七・一に急増し、四八年には三九・三、四九年には四五・九とやや微減し、五〇年になってやっと二三・六と低下した。ちなみに一九九〇～九五年の死亡率はイギリスで一二、日本で八‰だった。ポテトはアンデス先住民が西洋庶民に贈ってくれた《神の食物》だったが、利潤追求の手段にされると、やはり《悪魔の食物》に変貌したわけである。

五　日本への渡来と受容

視線をかえて、日本におけるポテトの伝来と普及について駆足で見ておこう。一章でも触れたが、ポテトは非常に早くから渡来している。諸家の考証によると、永禄一二（一五六九）年に長崎の南蛮寺、トードス・オス・サントス教会のそばの薬草園にポルトガル人が移植したという説が一番早く[11]、春山行夫は白井光太郎の『植物渡来考』（一九二九年）の「天正四〔一五七三〕年南京芋長崎に渡る」（『長崎両面鏡』）を引用している[12]。しかしこの「南京芋」はサツマイモのことと思われ、ひょっとするとカボチャのことかもしれない。カボチャも中米原産だが、渡来は早く天文一〇（一五四一）年にポルトガル船がカンボジアから豊後に伝えたといわれ――但しこれは日本カボチャであって西洋カボチャではなく、栽培は一六五一年以降――、そこから訛ってカボチャとなったが、また関西方言ではナンキンとも呼ばれたからである。その後慶長三（一五九八）年にポルトガル人がポテトを長崎に伝えた（『長崎誌』）とも、慶長六年ないし八年にジャガトラ港からオランダ船が運んできたのが最初ともいわれ、諸説紛々としている。

しかし西洋でも一五六〇年代に植物学者が実験的に栽培しはじめ、食料として出回るようになったのは、既述のようにセヴィラの病院会計帳の一五七三年の記録が最古とされているから、慶長以前に渡日していたとする説はいささか疑わしい。オランダ船の最初の渡航は慶長五年に豊後に漂着したリーフデ号でポテトを積んでいたかどうかは不明だし、そもそもオランダ東インド会社の設立は一六〇二年、東インド政庁のバンタム設置は同一〇年（二一年からバタヴィアに移転）だったのだから。

とはいえ、一六世紀中にポテトはその貯蔵性のよさから、重要な食料として洋船に積みこまれていたことは確からしい。一五八八年スペインの無敵艦隊（アルマダ）がイギリス海軍――といっても海賊船団に近かったが――と戦って敗れ、その残骸がスコットランドやアイルランドの海岸に打ちあげられた時、積荷にあったポテトを人々が掠奪し、それがイギリスへのポテト導入の濫觴（らんしょう）だったという伝承があるのだから。[13] 時代は下るが、安永七（一七七八）年七月日本へ向う途中船上で亡くなったオランダ商館長デュルコープの遺品の中にも食材としてカリフラワー、マッシュルーム、タマネギ、干野菜、ピクルス、パンと共にポテトが記録されていた。[14] また一八〇七年一〇月五日、オランダ国旗を掲げて長崎に入港したイギリスの軍艦フェートン号が、検分に同行したオランダ商館員二名を拉致し、捕虜と食料の交換を強要した時、日蘭側は水、薪、他の食料と共に『長崎オランダ商館日記』によると「二袋分の馬鈴薯(pattatters)」[15]を提供していた。

このことからすると、航海に必須の食料であるポテトをオランダ人は長崎近郊の農家に委託栽培させていたようである。ただし『平戸・長崎オランダ商館日記』や『バタヴィア城日記』には、交易品だった砂糖についての記録は多いが、ポテト栽培の記述は管見のかぎりでは見当らない。貿易が中心だったのだからそれも当然かもしれない。

しかし一旦は渡来していた筈のポテトは、その後人見必大の『本朝食鑑』（一六九五年）や宮崎安貞の『農業全書』（一六九七年）にも、寺島良安の『和漢三才図絵』（一七一二年）や新井白石の『東雅』（一七一八年）にも、越谷（こしがや）吾山の諸国方言集『物類称呼』（一七七五年）や小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（一八〇三～〇五年）にも出てこない。『農業全書』には「蕃藷」の栽培・貯蔵法がのっており、同じ南米原産でも渡日が少し遅かった――一六〇五年に中国の福建から琉球に伝わり、そこから長崎に導入して元和元（一六一五）年に植え付けた記録が、リチャード・コックスの日記にみえている――にも拘らず、甘いポテトの方が青木昆陽の『蕃藷考』（一七三五年）などによって救荒食物としての普及が早かったわけである。

その理由は、出島同様ポテト畠の出入りにも監視の目が厳しかったせいではないかと思われるが、とはいえ密かに禁苑から逃走するポテトがあったらしい。むろんポテトには足がないから人手によったものだろうが。というのも四国地方の山間部では今でも南米原種に近い古渡りのポテト、弘法芋が残っていて、その起源は天正四（一五七六）年だという言い伝えがあることを千葉徳爾はその「馬鈴薯雑考」で記録している。[16] そこでちょっとポテトの方言名についてのべておこう。外国でと同じくポテトの異名は極めて多く、千葉は「農林省の調査でいうと、さつまいもの地方名三五〔……〕、さといもが九二、つくねいも八九に対して、馬鈴薯は一〇二に及んでいる。しかも他の芋の地方名には品種のちがいによる名称の異なりが多く含まれるのに、馬鈴薯の場合は総称としてのちがいが大半らしい。そこに、伝播の系統の複雑さが介在することが推測されるわけである」[17] といっている。整理すると次のように分類できるだろう。

原名――アップラ（オランダ語の aardappel から、カンプラ、アンプラ、アンペラなどの訛音もある）

産地名――ジャガタラ芋、オランダ芋、甲州芋（ゴウシュウ、コウシ芋などの訛言がある）、秩父芋、上州芋、信州芋、信濃芋

収量――八升芋（一升植えると八升とれることから）、五升芋（同上）、饑年芋、寿命芋、二度芋（年二回とれることから）、仁玉（貧民に仁を施すことから）、お助け芋

色彩形態――赤芋、珊瑚樹芋、金色芋、銀芋、松露芋（これは西洋の《瘤〔tuber〕》系と同じ発想である）、金柑芋（きんかんは禿頭のこと）

人名――弘法芋、清太夫芋、善太芋、貞蔵芋

むろんこれはほんの一部にすぎないが、清太夫芋というのは、甲州代官中井清太夫が明和年間（一七六四～七一年）に九州（奥羽説もある）から種芋をとりよせて、富士五湖付近の村々で試作させたことから名付けられた。不思議にも丁度パルマンティエの活躍と同時代のことである。甲州芋の名もここからきている。後に飛騨の代官幸田善太夫が信州芋をとりよせて栽培させ、天保の飢饉（一八三三～三六年）の時にも餓死者を多くださずに済んだことから、その名がつき、またお助け芋とも呼ばれるようになった。この頃になると佐藤信淵の『経済要録』（一八二七年）にも「近来渡リタル馬鈴薯俗ニジャガタライモ、或ハオランダイモト云フ者アリ」と記載されているから、船員用の食料としてオランダ船が積んでいたポテトが裏ルートで流れていたのだろう。

高野長英が『救荒二物考』（天保七〔一八三六〕年）をかいたのは、やはり天保の大飢饉で餓死者が続出し、その死体まで食べた惨状に触発され、ソバとポテトの救荒食物としての有用性を奨揚するためだったが、主に種本にしたのがフランス人ノエル・ショメルの『日用家事事典』（一七〇九年）の蘭訳本（一七七八年）だった。同じ頃、大槻玄沢をはじめ当時の錚々たる蘭学者が幕府の命で天文方の蛮書和解御用局に集められ、この事典を『厚生新編』と題して、文化八（一八一一）年から弘化二（一八四五）年までかかって訳出していたのである。「五十年来蘭学の公学となりし始」とまでいわれたこの事業はしかし中途で途絶し、江戸時代に遂に刊行されることはなかった。従って長英は直接オランダ語で読んでおり、渡辺崋山の馬鈴薯図までイラストに入れて、正しくポテトの記述を行なっている。ところが『厚生新篇』では、「アヽルドアッペレン」を「按に此形状用法を以て察するに、全く甘藷のごとし」[18]とサツマイモと取り違えていた。蘭学の大家達でさえポテトのことをよく知らなかったわけである。殊に玄沢は天明五（一七八五）年から半年ほど長崎に遊学してポテトの煮物を食べており、また文政八（一八二五）年には「瓜加太刺芋図考」まで書いているのになぜ間違えたのか判らない。或いは誰にでもあるように、知識と原形の実物とが一致しなかったせいだろうか。

その後、文久元（一八六一）年になると羽後国（秋田県）岩野目沢村の肝煎だった岡田明義が『無水岡田開闢法』を著わしてポテト栽培の経済的有益性を江湖に喧伝した。単なる一村落の開明的指導者に止らず農業発展の経世済民家を志向していた彼は、那須原野の開発を幕府に提言したり、東北各地の農村調査のためあちこち巡歴していたが、安政六（一八五九）年に北海道へ渡った時そこでポテトに遭遇した。その有利性に目をつけ、帰るとすぐに村内の原野を開墾してポテトを栽培し、さらに澱粉の製造、それを原料とする酒・味噌・醤油の加工などを行なった。その体験を元にして書いたのがこの小冊子であり、「岡田」とは自分の姓でもあるが、また水田（天田）にはコメ、畠（地田）には雑穀を作るのに対して岡田（人田）にはイモを栽培すべしという意味が籠められていた。丘陵地帯の原野を開拓して出来たポテトを彼は「岡田糙」と名づけて、上・中・下・下々の地質からとれる生糙の反当り収穫量とそれに要する労働量および澱粉加工の投下労働量を詳しく計算して、ポテトが極めて大きな利潤をもたらす有利な農作物であることを数量的に明らかにしている。下々岡田でもコストや年貢などを差引いても年間一反歩で「壱軒ニ付金百拾三両壱分三朱ツヽ潤益」[19]と積算されている――これはしかしどうみても過大計算かと思われる――から、アダム・スミスの時代より約一世紀後に、西洋でと同じく換金作物としてのポテトの有利性が東北でも着目されて

いたわけである。

ところで、その明義が北海道で土佐の住人平野一郎からポテトの栽培・加工法を伝受されたことから判るように、この頃すでに北海道ではポテトが栽培されていた。最も早い記録は宝永三（一七〇六）年のようだが、寛政一〇（一七九八）年には松前藩の家老が藩主の命令で信州から五升芋の種をもち帰り、また同年に最上徳内が蝦夷地を訪れたときポテトを携行していたと伝えられている。これらの種芋はオランダ渡りのポテトが密かに転々と人手から人手へとリレーされていったものと思われるが、寛政元（一八五四）年になると今度はロシアから、また翌年の箱館開港以後はアメリカ合州国からポテトが渡来し、かなり普及していたようである。北海道大学図書刊行会の『近世蝦夷地農作物年表』（一九九六年）では、例えば「万延元年（一八六〇）箱館。ヲロシヤ大キ上キセン出帆、此船丑・馬・五升芋積行候」[20]とあるように、寄港した外国船に食料としてポテトを補給するまでになっている。次は一八五九年にイギリスの初代駐日公使オールコックが箱館を訪れたときの記録である。

「ひじょうに多量のジャガイモ――「本当のアイルランドのジャガイモ」だと通訳のひとりがわたしに保証した（かれは、おそらくアイルランド種のジャガイモという意味でそういったのであろう）――がこの地で栽培されているらしい。このことは、その豊富さと値段が安いことからわかる。町中では、一ピクル（一三〇ポンド）七五セントないし一ドルであるが、買辦（ばいべん）制度――とくに外国人が利用しているそれ――が不当な価格や利益を加えぬさきに村で買えば、三分の一の値段で買えることがわかった。[21]」

米語ではサツマイモ（sweet potato）のことを単にポテトと呼び、それと区別するためジャガイモのことをアイリッシュ・ポテト（Irish potato）というので、オールコックのいう通り直接アイルランドから輸入したものではなく合州国の捕鯨船などがもたらしたものだろう。明治期に入って川田男爵が北アメリカから移入した、いわゆる《男爵芋》を受け入れ、大々的に栽培する素地は、だから十分にあったわけである。こうしてインディオの贈物は、西洋でと同じく日本でもほぼ一九世紀前半には、長崎から北海道までの各地に浸透し終っていた。

最後にポテトを繞る日欧文化の異同を簡単にまとめておこう。どちらの社会もその受容には二世紀以上の長い時間を要し、普及の原動力

となったのは、人口圧と凶作による飢饉が主だった。その点では類似現象がみられるが、一般化が遅れた原因は違っていた。いうまでもなく日本では寛永の鎖国によって外国との交渉が途絶し、文物の交流もとだえ、種芋の自由な流入もありえなかった。ただ密かに篤農家による細々とした試作や先学者による救荒食物としてのその価値の宣伝が行われたにすぎない。古来から――そして現在も――みられる外来の食文化への開放性が一時期閉鎖されてしまったのである。その上、神話時代からの強力な米中心主義イデオロギー（ポテトが《岡田糙》と命名されたように）と禁止されたキリスト教への警戒心と恐怖心とから、少数の先人の努力も空しく、西洋でのようにポテトが貧民のパンとなることは遂になかった。鎖国という政治システムと石高制にみられるような経済システムがポテトの普及を抑止したのである。

これに対し西洋ではキリスト教がポテト忌避の原因となったことをまずあげておかねばならない。というのも既述のように、ヨーロッパには地下で結実する芋類が元来存在せず、見たこともない《悪魔の食物》だったので、それを口にすることは邪教に汚染するに等しかった。コロンブスの《発見》以来、陸続とアメリカ大陸からやってきて西洋に食品革命をおこした他の野菜、インゲンマメ、カボチャ、トマト、トウモロコシ、トウガラシ、サツマイモ、ラッカセイなども同じく邪悪の食物だった。もっとも最後の二作物は、気候が栽培に不適だったので口にできなかったせいでもあるが。大航海時代が始まったのも古代ローマ以来垂涎の的だった東洋のスパイスを求めてのことだったが、コロンブスは一四九三年一月一五日にエスパニョラ島で先住民がアヒと呼ぶ、中にひりひりと辛いコショウ（pimienta）のような粒の入ったスパイスを発見し、毎年カラベル船五〇隻分を積出せば大きな利益をあげられるだろうと考えた。[22] にも拘らずその予測がはずれ、急速に生産・消費が拡大しなかったのは、やはりその異様で「度肝をぬくような新奇さ」[23] だったとバローはいっている。なお英語で pepper にコショウとカプシウム属の両義がある――他の近代ヨーロッパ諸語でも多くは姉妹語である――のは、コロンブスがアラウカノ語のアヒをコショウ（pimienta）と呼んだ――後にスペイン語ではトウガラシを pimiento と男性形にして区別したが――ゆえである。ただインゲンマメだけは違った。豆類は古代ギリシア人もソラマメが好物だったように古くからヨーロッパに渡来していたし、エンドウマメは地中海沿岸が原産地の一つとされているから、コロンブスが第二次航海の時インゲンマメを《発見》し、スペインにもちかえると、またたくまに普及し、姉妹代替現象によってササゲの地位にとって代った。キリスト教以前から見馴れ食べ馴れた食品なら容易に受け入れることができたのである。

さらに大航海にのりだした西洋の科学技術力が珍奇な野菜を招来させたが、同時にまた逆説ながらその受容と普及を遅らせた矛盾を指摘しておかねばならない。というのも大型帆船を用い鉄砲を携えて世界各地を侵略、征服し、植民地化して宗主国となり、奴隷を従える主人となったことで、西洋人は自分たちだけが《最高の存在》だと自負するヨーロッパ中心主義思想に陥り、人間以下の動物に近い《野蛮人》の食物など、人類を代表する文明人が食べるべきではないと考えるに到ったからである。このことは例えばフランスで当初ポテトやカボチャ、トウモロコシなどを家畜の飼料にしていたことからも判るだろう。トウガラシは余りにも辛いので「家畜が食べたら死ぬ」という言い伝えがフランドル地方にあったから、タカノツメ（cone pepper）まで餌にしていたのかも知れない。邪教の蛮族の食物だったから、有毒だとか色んな病気の原因になるとか託けてフランス人は長い間ポテトを食べようとしなかったわけである。

一八世紀に入るとその忌避感が徐々に薄れて人間が食べるようになったのは、飢餓という即物性だけではなく、唯一神を戴く絶対神制と専制君主を戴く絶対王政の権威がしだいに失墜し、啓蒙思想による相対主義的な合理的、功利的な思考が優勢になってきたからだった。ラ・オンタン、ディドロ、モンテスキュー、ルソーなどの哲学者たちは、未開人もまた同じ人間であり、場合によっては文明人よりも優れていると主張していた。《善良で高貴な野蛮人》の食べ物であれば、文明人も遠慮なく相伴できるだろう。こうして旧制度が崩壊するとともに、ポテトは急速に普及し、市民の食物となっていった。丁度、馬肉を食べることが反教会的、反貴族的行動だとして、大革命直後大いに流行したように。なぜならカトリック教会は馬肉食を異教徒の印だとして長く禁止し、貴族は馬上でふんぞり返って平民を見下していたのだから。とすると一定の歴史社会の中で人々が何を選好するかは、必ずしもその食品の栄養学的価値によるだけではなく、またそこに記号として付された文化的意味に規定されていることが判るだろう。サーリンズもいったように、「人間固有の特質は、他のすべての有機体と分有する状況としての物質界のなかで生きねばならぬことではなく、まさに人間の能力の独自性を示す、自ら考案した意味体系にしたがって生きているという事実」[24]にあったのだから。

注

(1) クーリッシェル、一九二九年、七頁
(2) ブローデル、一九七九年、二六頁
(3) 山内昶、一九九五年
(4) ブローデル、同前、一四三頁
(5) スミス、巻二、四〇頁
(6) マルクス、一九六四年、八七六頁
(7) サラマン、一九七〇年、六〇〇頁
(8) エンゲルス、一九五七年、三〇三頁
(9) サラマン、同前、二九一頁
(10) 同前、三〇一頁
(11) 小菅桂子、二〇〇二年、九〇頁
(12) 春山行夫、一九七五年、一一九頁
(13) サラマン、同前、一五七頁
(14) 小菅、同前、六四頁
(15) 『日記』、巻四、一九九二年、二一一頁
(16) 千葉徳爾、一九九八年、二一〇頁
(17) 同前、二一八頁
(18) 杉本つとむ、一九九八年、一三〇頁
(19) 岡田明義、一九九六年、四二〇頁
(20) 小菅、同前、八三頁
(21) オールコック、一九六二年、三九四頁
(22) コロンブス、一九七七年、二一一頁
(23) バロー、一九九七年、二一六頁
(24) サーリンズ、一九八七年、二頁

参考文献

1 オールコック、一九六二年、『大君の都』上、山口光朔訳、岩波文庫
2 バロー、一九九七年、『食の文化史』、山内昶訳、筑摩書房
3 Braudel, 1979, *Civilisation matérielle, Economie et Capitalisme XVe-XIIIe siècle*, tome 1, Armand Colin.
4 コロンブス、一九七七年、『航海誌』、林屋永吉訳、岩波文庫
5 Engels, 1957, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, MEW, Bd. 2, Dietz.
6 春山行夫、一九七五年、『食卓のフォークロア』、柴田書店
7 小菅桂子、二〇〇二年、『カレーライスの誕生』、講談社
8 Kulischer, 1929, *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelarters und der Neuzeit*, Bd. 2, Neuzeit, München.
9 Marx, 1964, *Das Kapital*, MEW, Bd. 25, Dietz.
10 『長崎オランダ商館日記』巻四、一九九二年、日蘭交渉史研究会訳、雄松堂出版
11 岡田明義、一九九六年、『無水岡田開闢法』、『日本農業全書』巻一八所収、農山漁村文化協会
12 サーリンズ、一九八七年、『人類学と文化記号論』、山内昶訳、法政大学出版局
13 Salaman, 1970, *The history and social influence of the potato*, Cambridge U. P.

14 スミス、一九六〇年、『諸国民の富』巻2、大内・松川訳、岩波文庫
15 杉本つとむ、一九九八年、『江戸時代西洋百科事典』、雄山閣
16 千葉徳爾、一九九八年、「馬鈴薯雑考」、『全集・日本の食文化』巻三所収、雄山閣
17 山内昶、一九九五年、「世界経済のカタストロフィーが近づく」、『学研ムック』二八

（二〇〇二年一〇月二〇日）